

フランスで渡邊省亭に再び光を

クリストフ・マルケ

(フランス国立極東学院 教授・院長)

日 仏友好二六〇周年を機に「ジャポニスム2018・響きあう魂」という日本芸術を紹介する一連のイベントがパリで行われる今年、フランスで渡邊省亭に再び光を当てるチャンスだ。省亭はまさにジャポニスムの時代を生きた画伯であり、日仏美術交流の先駆けを担う人物である。

初 めて省亭の名前を知ったのは、今から三十五年前、大学で美術史を学びはじめた頃である。十九世紀後半の人気作家であり、日本美術コレクターとしても名高いゴンクールゴンクールの日記がきっかけだ。一八七八年に、万博の開催地であるパリにやってきた弱冠二十七歳の省亭が、日本美術愛好家を熱狂させ、マネやドガら印象派の巨匠と交流したというゴンクールゴンクールの記述に心踊った。当時のフランスの芸術家に、省亭の優れた技術はとりわけ珍重された。省亭は

フランス人の前で繰り返しパフォーマンスを披露し、「手品師の様な素早さで」日本画の技法を駆使して席画を描いて見せたわけである。同時にパリに留学していた山本芳翠とともに、フランス人が初めて認めた明治の画家である。

省 亭の帰国後、一八八三年とその翌年に龍池会と画商ビングがパリの工業館で主催した日本美術縦覧会で、狩野芳崖、橋本雅邦などと共に、近代日本画の代表的な画家として、省亭の《雪竹に鶏図》《葦に翡翠図》《雨中狗兒》図1が出品された。当時の仏人評論家はとりわけ芭蕉の下で戯れる狗兒の作品を「印象派の画家たちが巡礼すべき」傑作であると讃えている注1。

し かし残念ながら、パリで省亭の絵はほとんど残っておらず、今のところ見つけることができたのは、フランス国立図書館所蔵の一点のみである。省亭が得意とする花鳥画ではなく、珍しく風俗画である。月夜の街道で通行中の町人を襲う追い剥



図1 《雨中狗兒》絹本 着色 明治17年 144×55cm ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵 ©mrah

ぎの首領と手下を描いた絹本墨画である図2。省亭と同じく菊池容齋に師事した松本楓湖などの花鳥画、武者絵など十二枚と共に画帖仕立てになっている。一八八八年に、フランスの東洋学雑誌注2の図版に石版で複製され、翌年のパリ万博で展示された。当時の所蔵者は、有名な和本の蒐集家で、山本芳翠とも交流したオーギュスト・ルスエルスエフルスエ（一八二九〜一九〇六）である。その後、他の作品もフランスで発見されることを期待したい。

パ リのギメ美術館で、十月から開催される明治美術展に、幸いなことに河鍋曉斎、柴田是真と並んで、省亭の肉筆、版画、そしてヨーロッパ

で人気だった無線七宝（瀟川惣助作）が数点展示されることとなった。なかでも《雪月花図》図3という三幅対がパリで紹介されることはとりわ



図3 《雪月花図》絹本 着色 個人蔵

け嬉しい。その不思議な魅力を一言で表すとすれば、和洋折衷の余白の美であり、省亭の繊細な表現を代表する逸品だ。絶妙な桜と燕、月下の花菖蒲の鮮やかな色彩、雪に埋もれた竹に雀の微妙な表現。華やかな色彩の春、灰色に覆われている冬など季節のコントラストが印象的で、省亭の観察力の素晴らしさを物語る傑作である。

若 冲から藤田まで巨匠の展覧会が数多く開催されている中で、省亭の没後百年に当たるこの年に、フランスで省亭に再び光を当てる第一歩である。今回の展示がきっかけとなり、近い将来、その画業を顧みる大規模な展覧会がパリで行われることを願っている。



図2 無題 絹本 墨画 明治21年以前 17.8×20.7cm フランス国立図書館蔵 (BnF, dép. des Manuscrits, Smith-Lesouëf Japonais 189)

注1: Victor Fournel, *Le Correspondant*, t. 135, 1884, p. 707.

注2: « Grisaille du peintre Sei-tei », *Mémoires de la Société sino-japonaise*, t. VII, 1888, p. 188.